# 水俣学通信

第 40 号
2015.5.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies

水俣今昔シリーズ１　水俣市大迫の湯の児島（1960年と2014年）

目　次

論説：
「水俣市内の水銀による土壌汚染」… 2
永野隆文

「水俣病認定患者（新潟）の毛髪水銀濃度と神経症状」…… 3
丸山公男

報告：
「タイ・チュラロンコン大学・平和と紛争研究センターとの学術交流協定締結とマプタプット調査」…… 4
宮北隆志

「長崎大学『アジアの平和と人間の安全保障』研修―水俣訪問を終えて―」…… 5
青木浩司（他）

「第13期水俣学講義の報告」……5
中地重晴

「水俣学研究センター水俣現地研修に参加して」…… 6
原田千佳子

「平成27年度　科学研究費助成事業採択結果」…… 6

追悼：
「丸山定巳先生 追悼」…… 7
花田昌宣

書評：
「心とからだに聴く話」…… 7
高峰　武

「『私立大学戦略的研究基盤形成支援事業』事後評価報告」…… 8

水俣学研究センター新刊紹介…… 8

水俣学研究センター日録…… 8

熊本学園大学水俣学研究センター

《論 説》

# 水俣市内の水銀による土壌汚染

みなまた地域研究会
（水俣学研究センター客員研究員） 永 野 隆 文

2014年度、みなまた地域研究会は、袋湾定点での生き物調査、水俣湾底質調査、水俣市内の土壌汚染調査、漁民への聞き取り、北海道イトムカ鉱山視察、講演会の開催などを行いました（35、37号）。ここでは、9月30日に実施した土壌汚染調査を中心に報告します。

チッソが水俣に来たのは1908年。以来水俣市の中心企業としての歩みを進めました。1914年に肥料製造に伴いヘドロが流出、海の汚染が始まったとあります。1932年から36年間、メチル水銀を含んだ廃水を無処理で流し不知火海を汚染、水俣病を発生させました。平行して、1947年頃から、アセチレン発生に用いたカーバイド残渣を、海面埋め立てプールを作って流し始め、プールを拡張しながら、1958年頃には、八幡残渣プールに水銀を含んだ酢酸廃水や硫酸廃水、燐酸廃水を流しこみました。更に、水俣市内の各地にカーバイド残渣を埋めているという事実もあります。

水俣市公害調査報告書（1975年度～1976年度上期）によると、水銀が「大迫廃棄物埋立地廃活性炭埋立地と明神」に、カーバイド残渣が「新水俣駅西側駅前（国道）付近、水俣駅東南（自動車学校）付近、百間水路放流口付近、大迫、藪佐、明神、ちどり保育園周辺、水俣市学校給食センター～警察アパート周辺、県立水俣工業高校周辺、市立水俣第二中学校付近、汐見町公民館周辺」に埋め立てられたとの記載があります。

複合汚染及び有害汚染物質名が不詳の地域としては、「やすらぎ苑付近、コーポ白浜～毎日新聞水俣販売店付近（白浜町一帯）、ひばりヶ丘運動場・水俣警察署・水俣芦北広域行政事務組合消防本部、江川水俣工場付近、渕上病院付近、グリーンパークゴルフ練習場、水俣環境テクノセンター、水俣エコタウン、熊本県水俣保健所、メゾンはなみずき、水光社ハウジングサービス、水俣市シルバー人材センター、水俣市環境クリーンセンター、水俣市浄化センター、水俣総合技術センター、すずかけ保育園一帯、市立第二小学校などチッソ工場周辺一帯、熊本県環境センター南（明神町）、チッソ開発（汐見町）、水俣広域公園（エコパーク水俣）、道の駅たけんこ、水俣港湾合同事務所、水俣フェリーターミナル、アール・ビー・エス月浦センターなど埋立地一帯、新栄合板工業」があげられていて、個所ごとに汚染状況が示されています。

これらの地域名は、水俣に住む人なら誰もが知っていますが、改めて並べてみて、水俣市内に産業廃棄物を投棄した場所の多さに愕然とします。恐ろしいことに、その後、これらの地域の調査は、一切行われていません。水俣病事件は人的被害と海の汚染が問題となってきましたが、このことも看過できないのは、言うまでもありません。

今回、地域研究会は、1976年の調査地点のうち、3カ所の土壌を採取して分析、明神から基準値の11倍を超える1kgあたり170mgの水銀が検出されました。この調査を行うまで40年間放置されていたことになります。私たちは、土壌汚染対策法に基づいて範囲を広げての詳細な調査、調査指示を出すように熊本県に要求しましたが、熊本県の反応は鈍く、調査の気配はありません。明神現地の所有者はチッソで、覆土しアスファルト舗装を始めました。また、有害物質を含んだ八幡残渣プールなどの広大な敷地は、最近、汚染土の海への流出の恐れが指摘され、マスコミでも報道、一部を水俣市が買い上げていることから対応に追われています。この対策に税金も投入されるのですから、土壌の素性を調べて購入したのか、水俣市の責任問題も浮上するのではと思います。

こうした状況の中、今、私たち市民がどう考え行動するのかは大事なことです。とはいえ、市民がどの程度関心を寄せているのかも気になるところです。そこかしこ埋められていることでマヒしているのでは？何が問題なのか市民が分かるように説明することが今後必要ではないでしょうか。水俣には環境学習を兼ねた修学旅行生なども大勢やってきます。水俣の土壌汚染の歴史と対策について、説明できるものを私たちは持たなければと思います。

チッソは水俣市内全域に産業廃棄物の捨て場を拡大していきました。しかし、捨てられた地域、廃棄されたものの種類、量など、その全貌は明らかになっていません。追跡調査も行われていないことから行政の役割も見えません。これだけもの土壌汚染が見つかった時に一般的にはどうするか、プロセスは？当たり前の対策が行われているか。水俣病公式確認から来年で60年。「何をしなかったのかというのが水俣病の教訓」と言ったのは、原田先生です。今回の土壌汚染調査からその点がよく見えてきています。今回の熊本県の対応も「臭いものにはふた」の発想です。チッソ、行政とも水俣病の教訓が活かされていないのは明らかではないでしょうか。

チッソは、水俣病を発生させた。しかし、チッソ水俣工場の展示室の沿革には、水俣病の記述はありません。土壌汚染についてはどう考えているのか聞いてみたいものです。

《論 説》

# 水俣病認定患者（新潟）の毛髪水銀濃度と神経症状

新潟青陵大学　丸 山 公 男

## 【背景】

メチル水銀による大規模な中毒症は1950年代に水俣に、1960年代に新潟に、1970年代にイラクに発生した。水俣では、メチル水銀中毒症の集団発生の初期にはメチル水銀が病因物質であるとわからなかったため、メチル水銀曝露は測定されず、メチル水銀曝露と神経症状との関係を評価することはできなかった。

一方、新潟とイラクでは、初期の段階からメチル水銀が中毒症の病因物質であると認められたので、水銀の曝露量が測定され、神経症状との関連が調査された。新潟の論文では、メチル水銀中毒症と認定された26人の1965年の毛髪水銀濃度は52～570ppmの範囲であった。

WHOはこれらの報告をもとに、「魚を多食する人口集団では、高い血中メチル水銀レベル、およそ200μg／リットル（毛髪50ppmに相当）に達するかもしれないが、成人への神経学的傷害の危険性は低い（５％）」という見解を示した。

## 【目的】

新潟の調査で毛髪水銀濃度が50ppm未満の患者の中に多くの水俣病認定患者が含まれていることはあまり知られていない。水俣病認定患者に着目し、毛髪水銀濃度と神経所見について記述することを目的とした。

## 【方法】

新潟ではメチル水銀中毒症の集団発生の初期、1965年６月に阿賀野川下流域で２つの調査が行われた。これらの調査でメチル水銀中毒症を示唆する症状や所見が認められる、または、多量に阿賀野川の魚を摂取している、または、家族にメチル水銀中毒症と関連する症状が認められる、という条件を満たした1,386人の毛髪水銀濃度が測定された。

1,386人のうち1965年～1986年の間に２つの医療機関（沼垂診療所と木戸病院）で標準的な神経学的検査を用い、椿の診断要項に準拠し、メチル水銀中毒症の診断を受けたのは109名であった。109名のうち97名が水俣病の認定を受けた。うち94名が成人であった。毛髪サンプルの水銀濃度はジチゾン法、放射化分析と原子吸光法の３つの異なる方法により新潟大学で測定された。対象者のデータは四肢末梢、口周囲、全身の知覚障害、運動失調、視野狭窄、聴覚障害、言語障害と平衡障害に関して集められた。

## 【結果】

毛髪水銀濃度50ppm未満で40名の水俣病認定患者がいた。94名成人水俣病認定患者の毛髪水銀濃度別の特徴では、100ppmより高い群と10ppm未満群の対象者は1965年時、より若く、男性が多い傾向が認められた。100ppmより高い群では、症状が現れた後早期に受診する傾向が認められた。

94名成人水俣病認定患者の毛髪水銀濃度別の神経症状の出現頻度では、両側四肢末梢知覚障害95.7％、平衡障害84.9％、運動失調77.7％、聴覚障害73.6％、口周囲の知覚障害61.7％、視野狭窄45.3％と続いた。毛髪水銀濃度50ppm未満の対象者でもメチル水銀中毒症に関連した種々の神経症状が認められた。

## 【考察】

1,386人中の97名、7.0％という対象者の選択過程では、毛髪水銀濃度50ppm未満の水俣病認定患者がメチル水銀曝露によって神経症状を誘発されたと推論することについて疑問が生じるかもしれない。しかし、非曝露人口では、両側四肢末梢の知覚障害の有病率は、稀で０-1.1％の範囲である。第２に、両側四肢末梢の知覚障害は、曝露地域の、水俣病（メチル水銀中毒症）の診断のためのゴールドスタンダードであることが知られている。第３に、医療機関に受診しなかった人がどのような神経症状も持たなかったと仮定すると、両側四肢末梢の知覚障害の割合は、０－10ppm、10－20ppm、20－50ppm、50－100ppm、＞100ppmの毛髪水銀濃度群ではそれぞれ1.1、3.2、5.8、22.0、52.5％となり、なお一般人口（０-1.1％）より高い割合である。

したがって、毛髪水銀濃度50ppm未満の水俣病認定患者の典型的な神経症状はメチル水銀曝露によると考えられる。

今回の調査では10ppm未満群に５名の水俣病認定患者がおり、最低の毛髪水銀濃度は放射化分析によって測定された4.2ppmであった。

今回の研究の限界は測定された水銀値が実際にピークの値であったか明らかでない点である。２番目に、３つの異なる水銀測定法が用いられている点である。

## 【結論】

今回の研究では、毛髪水銀濃度が50ppm未満でも40名の水俣病認定患者が認められており、現在のWHO基準（50ppm）未満のメチル水銀曝露により水俣病（メチル水銀中毒症）が生じる可能性を示唆する。そして、現在のWHO基準（50ppm）未満のレベルでのメチル水銀の長期の曝露が神経症状、特に両側四肢の知覚障害を生じさせる可能性を示唆する。

最後に、データを提供してくださった、木戸病院の斎藤恒先生、沼垂診療所の関川智子先生に感謝申し上げます。

《報 告》

# タイ・チュラロンコン大学・平和と紛争研究センターとの学術交流協定締結とマプタプット調査

水俣学現地研究センター長　宮 北 隆 志

## 学術交流協定の締結

今年２月20日、2008年から親交を深め、東部ラヨーン県におけるマプタプット工業団地の拡張に伴う公害・健康被害や、東北タイ、ルーイ県における金鉱山問題などについて共同研究を進めると共に、バンコクでのセミナーなどを共催してきたタイ・チュラロンコン大学平和と紛争研究センターと熊本学園大学水俣学研究センターとの間で、学術交流協定が締結されました。

当日は、花田、中地、吉村、宮北の４名でチュラロンコン大学を訪問し、平和と紛争研究センター所長のスリチャイ・ワンゲオ教授と水俣学研究センター長の花田教授が協定書に署名しました（写真）。また、今後も、タイにおける様々な公害事案と日本における水俣病事件に関わる社会科学的な調査研究を、公害・健康被害の現場に根ざすことを基本に、地域社会に開かれた両センターの共同で進めていくことが確認されました。

学術協定を締結し握手を交わすスリチャイ教授と花田センター長
（写真 水俣学研究センター）

## マプタプット市発祥の地域での調査

その日の午後には、この間、マプタプット工業団地の問題に共に取り組んできたEARTH（Environmental Alert and Recovery – Thailand）のメンバーと合流し、ラヨーン県に向かい、翌日から４日間の訪問・聞き取り調査を行いました。

調査初日、午前中には、マプタプット・パンピタヤカン中高等学校を訪問し、環境ジュニアガイドのメンバー５人と顧問を務める先生から学校内や地域での様々な活動について話を聞きました。

この学校は、マプタプット市の発祥の地であるワット・ソーホン地区に1979年に設立された学校（当時、生徒数80人）ですが、1980年代初頭に工業団地の建設が始まって以降、悪臭を伴う大気汚染が深刻化し、2002年に５kmほど離れた現在の敷地に移転しています。

今回のヒアリングでは、生徒たちが環境ジュニアガイドの活動を通じて工業団地事務所や工業団地内の火力発電所（BLCP）や石油化学系大手企業（PTT、SCGなど）のＣＳＲ活動に定期的に参加し、１日200バーツから500バーツの報酬を受け取っていること、また、これらの活動に積極的に関わることが大学進学のための奨学金（年間10万バーツ、４年間で計40万バーツ）にもつながることなどが見えてきました。

午後には、マプタプット寺を訪ね、住職から工業団地の立地に伴う地域（集落）の変容について話を聞きました（写真）。マプタプット寺は古くから集落の人々の集まるところとしての機能を果たしており、1960年にタイ仏教法で寺として新たに認定を受けています。住職は、1958年に23歳で出家、1961年にこの寺に入職、1964年に現在の地位に着きました。入職当時は、数百人の集落で、寺は田んぼと畑（キャッサバ、マンゴー、パイナップルなど）に囲まれ、幾つかのキャッサバ加工場があったそうです。1980年ごろに工業団地建設のための土地の接収が始まり、1987年ごろから（何も知らないうちに）あっという間に工場が拡がったこと、当初、「工場で働ける」と考えたが、住民の学力が低いこともあって工場に雇われることはなかったこと、また、ここに長く住んでいる住民は工場からの臭いも気にならなくなっているが、他所から来た人、体の弱い人は臭いを感じることなどの話を聞くことができました。

マプタプット寺にて（右端、プラクースム・タンマタダー住職）

調査の詳細は、改めて報告したいと思いますが、「工業団地と周辺コミュニティの共存」という課題の解決に向けて、住民の知る権利と健康リテラシーを向上することの重要性を改めて確認した４日間でした。

《報 告》

# 長崎大学「アジアの平和と人間の安全保障」研修
## ―水俣訪問を終えて―

長崎大学大学院国際健康開発研究科　青木浩司　折戸菜穂子　手嶋正志

長崎大学では、「世界展開力強化事業 アジアの平和と人間の安全保障学生交流プログラム」の一環として、2015年２月９日から19日までASEANの５大学、12人の留学生の受け入れを実施した。これらの留学生と長崎大学大学院生を含む15人は２月14、15日の２日間に水俣市を訪問し、水俣病に関するフィールド学習に参加した。

１日目は、環不知火プランニングの西愛子氏による解説のもと、実際に水銀に汚染されていた地域や水俣病資料館の視察を行った。２日目は、熊本学園大学の花田昌宣先生、中地重晴先生から講義を受け、水俣病協働センターの水俣病被害者の方からも話を伺った。

水俣病の原因やその症状、歴史、そして現在も残る様々な問題についての講義やフィールド視察を通して、水俣病が単に環境破壊や身体的な健康被害だけではなく、差別や貧困、人権侵害などの様々な問題も引き起こしてきたことを学んだ。今回のフィールド学習は水俣病の事例を通じて「アジアの平和と人間の安全保障」という包括的な概念を、人々の健康という側面から理解する上で大変有意義なものであった。また、現在開発が進むASEAN諸国において、公害は既に大きな社会問題であり、水俣病のような悲劇を二度と繰り返してはならないことを再認識した。

エコパーク水俣では、水俣病被害者の方々に黙祷を捧げた。参加者は水俣病被害者の方々へ思いを巡らし、それぞれの自国の開発が持続可能なものとなり、さらにはアジア全体のより良い未来に繋がることを祈念した。

ASEAN留学生と（写真：長崎大学）

《報 告》

# 第13期水俣学講義の報告

熊本学園大学社会福祉学部
（水俣学研究センター事務局長）　中 地 重 晴

水俣学講義2014年度は13期を迎え、秋学期の木曜日３時限（９月25日から１月22日）に、開講されました。社会福祉学部４学科の共通開講科目ということで、これまでで最高の約180人の学生が受講しました。

本講義は、原田先生が提唱された水俣学を学生に伝え、共に考えてもらうことを目的に2002年から毎年開講しています。本学の水俣学研究センターに関わる専任教員だけでなく、学外から水俣病患者、研究者、弁護士、マスコミ関係者など様々な立場から水俣病問題に関わった方々を招いて、講義していただいています。第１期から13期までの学外からの講師は100名を超えています。13期も学外から８名の方に講義していただきました。

水俣学講義 坂東克彦先生
（写真：水俣学研究センター）

2014年度の講義では、新潟の坂東克彦弁護士から、第一次訴訟で、新潟から熊本まで法廷期日に通った頃の苦労を聞くとともに、水俣病発生から約60年、第一次訴訟の判決から40年経っても、被害者への補償がきちんと行われず、問題が解決していないことに対する思いを熱く語ってもらいました。受講した学生にどこまで伝わったか、フォローアップも大切だと思います。

水俣病問題だけでなく、水俣学研究センターで取り組んできたタイのマプタプット臨海工業団地の公害問題など、海外での公害問題とどのように向き合うのかなどの報告がありました。また、法政大学の小林先生からはＮＨＫテレビの映像アーカイブから、水俣病問題の本質を解説するという新しい取組みについて報告していただきました。学生たちには新しい知見と学問に対する刺激を与えたと思っています。

本年度は第14期として秋学期９月24日木曜日の13時から、開講します。インターネットでのライブ中継もあります。番外編として７月６日（月）から３回、無料動画オンライン学習サイトのスクー（https://schoo.jp/campaign/2015/univ_2015）でも開講する予定ですので、あわせて、聴講していただければありがたいです。

《報 告》

# 水俣学研究センター水俣現地研修に参加して

熊本学園大学図書情報課　原 田 千佳子

水俣病に関して全くの無学でした。それは、水俣病＝恐ろしい、というイメージが無意識下にあったことにもよります。患者に対してでもなく、原因にでも、環境への悪影響に、と具体的な何かにではなく、それは知らなかったこと、学ばなかったことから来る、漠然としたものへの恐れでした。

参加した今、知ることで漠然とした恐れは晴れつつあります。このような機会に恵まれたこととお世話いただいたセンター職員の方々に感謝申し上げます。研修を続けてこられていること、複数回の参加者にも毎回の発見をくださることに、「知って欲しい」「水俣に来て見て欲しい」というセンター職員の方の思いを感じました。

見学したのはまさに現地。百間排水口や患者が多発した地域、エコパーク（水銀汚泥を埋め立てた）など。砂利浜や簡易の堤防に打ち寄せる海水は、水俣病の歴史とは無縁の青色をして、ここで続く苦しみをより物語っているようでした。センター職員の方からの説明は事実のみでした。調査に裏づけされた事実です。見たことや聞いたことを、それぞれが受け取り、それぞれが持ち帰り咀嚼ました。それが義務であるかのように。こんなにも明らかな悪が在っていいはずがない、そうではないか、と誰かに伝えたいと思う衝動の一方で、自分には知り得たことを語る力がまだ足りないとも今はまだ尻込みしてしまいます。

現地研究センターには図書や新聞に限らず、写真やメモ、調査資料なども保管してありました。順次データベース化なさっているところでした。当時を様々な立場から見つめて来た方々がこの作業には携わっておられ、珍しく貴重な作業方法だともうかがいました。水俣病の理解を深め広めるためには、このような資料の保管だけではなく、系統立てて整理することは大変重要だと、図書館で働く身として大きくうなずきます。知りたいと思う人の、それは大きな助けとなるはずです。もちろんわたしのような者にとっても。

患者多発地域坪谷を歩く
（写真：水俣学研究センター）

◆当センターでは、年に一度、学内教職員を対象に、水俣学現地研究センターならびに漁村地区など現地訪問研修を実施し、当センターと本研究プロジェクトに関する理解を深め、研究基盤形成を学内的に支援する体制に資するとともに、研究を支える人材を育成することを目的として「学内教職員水俣現地研修」を開催しています。2014年度は、2月28日（土）学内各部署から10名の教職員に参加していただいた。今回、参加いただいた原田さんに執筆いただきました。（M・T）

## 平成27年度 科学研究費助成事業採択結果

水俣学研究センターで本年度採択された科学研究費助成事業は以下の4件と継続が2件である。

〈新規採択〉

- **基盤研究（B）**
  研究代表者：花田昌宣
  研究課題名「水俣病被害とその影響をふまえた水俣地域市民社会の再生に関する総合的研究」
  補助事業期間：平成27～29年度
  補助金額：1,573万円
- **基盤研究（C）**
  研究代表者：井上ゆかり
  研究課題名「水俣病多発漁村住民の水銀暴露と健康障害および補償給付の連環の実証的研究」
  補助事業期間：平成27～30年度
  補助金額：468万円
- **基盤研究（C）**
  研究代表者：田尻雅美
  研究課題名「生の視点からとらえた水俣病当事者の社会福祉的ニーズの表出と実現に関する研究」
  補助事業期間：平成27～31年度
  補助金額：455万円
- **研究成果公開促進費（データベース）**
  研究代表者：花田昌宣
  データベース名称「水俣学研究文献データベース」
  補助事業期間：平成27年度
  補助金額：370万円

〈継続〉

- **基盤研究（B）（海外学術調査）**
  研究代表者：宮北隆志
  研究課題名「タイ東部臨海地域における工業化・地域社会の変容と健康の社会的決定要因に関する研究」
  補助事業期間：平成25～27年度
  補助金額：1,495万円
- **基盤研究（C）**
  代表者：藤本延啓
  研究課題名「不法投棄に関する社会史研究―豊島地域社会に対するミクロ・マクロリンク的視角から」
  補助事業期間：平成25～28年度
  補助金額：317万円

（金額はいずれも総額）

《追 悼》

# 丸山定巳先生 追悼

水俣学研究センター長　花 田 昌 宣

丸山定巳先生が2014年12月27日食道がんのため他界された。享年74。知られているように水俣病訴訟を支えた水俣病研究会の中心メンバーのお一人。1970年刊の『水俣病にたいする企業の責任』（2007年水俣学研究センター資料叢書として復刻）にもメンバーの一人として名前が見える。

丸山先生は、2005年熊本大学文学部を退職後、2006年には発足間もない水俣学研究センターの客員研究員に就任され、私どもの研究活動に加わっていただいた。久留米工業大学を経て、2010年に熊本学園大学社会福祉学部教授に就任され、環境社会論や社会調査論を担当、また大学院では環境社会論特殊研究を担当されていた。また同時に水俣学研究センターの研究員として水俣学講義を担当されるとともに、センターの中心的存在として活躍していただいた。

丸山先生の水俣地域の「チッソ企業城下町論」は、水俣病の発生、拡大防止、被害補償にかかる混迷を理論的に解きほぐす重要な提言であり、水俣病とは何かを伝えるのに大きな発信力があった。また私どもの調査や研修にも参加され、水俣ばかりではなく足尾などの調査にも富樫貞夫先生とともに同行していただいた。

丸山定巳先生、ラオスにて
（写真：水俣学研究センター）

2012年、タイの東部臨海工業地帯の公害調査に加わっていただき、チュラロンコン大学で開催されたシンポジウムでは、石油化学コンビナートによる公害が発生している件について、研究者の報告や住民の発言のあと、丸山先生が立って、工業地帯における企業群による地域支配の構造や住民の意識にもっと注目する必要があるとまとめられ、200人はいたであろう会場全体がしーんとなった。水俣病の負の教訓を見事にタイの人々に伝えることができた瞬間だった。　合掌。

## 書評　『心とからだに聴く話』（原田正純、熊本日日新聞社、1,300円＋税）

水俣学研究センター客員研究員　高 峰　　武

このところ、水俣病問題に向き合ってきた人たちの訃報に接することが多い。

昨年12月27日には、社会学の丸山定巳先生が亡くなった。享年74。眼差しの優しさが持ち味だった。熊本大学から熊本学園大学に移ってもその姿勢は変わらなかった。

宮澤信雄さんは2012年10月11日の死去、享年76。ＮＨＫの元アナウンサーで、いい声の持ち主だったが、親父ギャグというか駄じゃれをよくとばした。しかし、資本や体制の論理には厳しい声を上げた。

そして原田正純先生である。2012年６月11日。享年77。原田先生は水俣学の生みの親である。磁力の強い人で、原田先生の磁力に引かれてさまざまな人が集った。

2014年に入って間もないころ、原田先生の奥様・寿美子さんから相談を受けて、本書の準備に取り掛かった。本書に収めたのは、「労金新聞」に1988年から亡くなる直前の2012年５月までの25年間に書かれたメディカルエッセーである。原稿を読むたびに、先生の、縦横無尽でしなやかな筆使いに教えられることが多かった。井上ひさしにならって言えば、難しいことを分かりやすく、分かりやすいことをより深く、深いことをより面白く、そんな“原田流”がここにはあった。一人でも多くの人にこの本を読んでもらいたい。

「バトンは渡したよ」。帯に使った原田先生の笑顔が語り掛けているようである。

丸山先生、宮澤さん、ともに水俣学研究センターという磁場に集まった人でもあった。「水俣病をどう正しく伝えるか」。いろんな方の訃報に接するにつれ、この「どう正しく伝えるか」ということが気になるようになってきた。「水俣病の教訓」が今、至る所で語られている。それはそれでいいことだろうが、しかし一皮むいて、「じゃ、教訓って何ですか」と聞けば、どれほどの人が具体的に答えられるだろうか。教訓は本来、抽象的なことではない。身を切るような自省の中からしか生まれないものだ。

「どう正しく伝えるか」。本書がその一助になれば、と思う。

## 「『私立大学戦略的研究基盤形成支援事業』事後評価（平成26年度実施分）」報告

2015年１月19日、熊本学園大学水俣学研究センターは、平成22年度～平成26年度までの事業を実施しておりました文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「人類の負の遺産としての公害、水俣病を将来に活かす水俣学研究拠点の構築」における事後評価におきまして、最高の「ＡＡ」（２名の私立大学戦略的研究基盤形成支援検討委員会委員による評価がともにＡ評価、優れた研究成果を上げている）を頂きました。

水俣学研究センターは、本評価を受け、これまで以上に地元に密着した調査、研究に努めたいと存じます。

## 水俣学研究センター新刊紹介

### 水俣学ブックレット⑫

新版「ガイドブック　水俣を歩き、ミナマタに学ぶ」

熊本学園大学水俣学研究センター 編

### 水俣学ブックレット⑬

「いのちをつなぐ　～水俣、福島、東北～」

花田昌宣、中地重晴 編著

発行：熊本日日新聞社　各800円＋税
（熊日出版　☎096－361－3274）

## 水俣学研究センター日録

### １月

| | |
|---|---|
| ８日 | 水俣学講義⑬「水とコモンズ：水源管理としての米国国立公園・国有林」：森下直紀氏（大学） |
| ９～12日 | 第10回水俣病事件研究交流集会：花田・田尻、９～10日　宮北・中地（新潟） |
| 15日 | 水俣学講義⑭「『失敗の教訓』を将来に活かす～急速な工業化が進むタイでの取り組み～」：宮北（大学） |
| 17～18日 | 胎児性水俣病世代の被害に関するＷＧ・阪南中央病院受入：花田・井上・田尻（水俣） |
| 19日 | タイ科研研究会　保健科学大学岩下氏：宮北・花田・中地・藤本・井上・田尻（大学） |
| 22日 | 水俣学講義⑮「世界の水俣病の現状と未来へのメッセージ」：花田（大学） |
| 30日 | 環境モデル都市フェスタ実行委員会：藤本（水俣） |

### ２月

| | |
|---|---|
| ６日 | 京都大学東南アジア研究センター等研修受入：花田（水俣） |
| 10日 | 芦北人権教育ＦＷ案内：井上（女島） |
| 14、15日 | 胎児性水俣病世代の被害に関するＷＧ：東・伊東・谷・山下・花田・井上（水俣） |
| 15日 | 長崎大学「アジアの平和と人間の安全保障」水俣研修受入：花田・中地（水俣） |
| 17～27日 | タイＭＴＰ調査：花田、19～25日：宮北・中地、12～26日：吉村（タイ） |
| 25～26日 | Ｆ氏補償協定地位確認訴訟第１回口頭審理傍聴：井上・田尻（大阪） |
| 28日 | 水俣学研究センター学内教職員水俣現地研修：宮北・田尻・井上・甲斐（水俣） |

### ３月

| | |
|---|---|
| ３日 | ゼロ・ウェイスト円卓会議：宮北・藤本（水俣） |
| ７日 | 胎児性水俣病世代の被害に関すＷＧ：花田（大阪） |
| 11日 | 国際医学生連盟受入：宮北（水俣） |
| 14～15日 | 公害教育科研研究会：宮北（東京） |
| 16～20日 | 水銀条約アジア地域会合：中地（インドネシア） |
| 17日 | 済々黌高校SGHS水俣研修：宮北（水俣） |
| 22日 | 環境モデル都市フェスタ：宮北・藤本（水俣） |
| 23日 | 第二世代訴訟控訴審第２回口頭審理傍聴：花田・井上（福岡）<br>新潟水俣病第三次訴訟地裁判決傍聴：田尻（新潟） |
| 24日 | 龍谷大学青木先生水俣調査受入：井上・田尻・山下（水俣） |
| 25日 | みなまた地域研究会水銀処理講演会：花田・宮北（水俣）<br>神奈川大学アジア研究センター現地研究センター訪問：花田 |
| 25～26日 | チッソ労働運動史研究資料調査：富田（水俣） |
| 28日 | 丸山定巳先生お別れ会：花田・藤本（熊本） |

## 編集後記

表紙の写真は、ホームページに掲載してある水俣学アーカイブスの「水俣今昔」からお届けしています。関心のある方は、ホームページをご覧ください。今回も、掲載したいものがあり過ぎて、紙面の制限いっぱいになってしまいました。日録もかなり割愛しています。また、水俣現地に新しいスタッフが加わりました。本年度も、よろしくお願い申し上げます。（Ｍ・Ｔ）

水俣学通信
第40号　2015.5.1

編　集／熊本学園大学水俣学研究センター　　発行人／花田　昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1　熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913（ダイアルイン）　Fax：096-364-5320
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/　E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印　刷／ホープ印刷株式会社